

幼児期における音楽教育の導入の試み —認定こども園での鍵盤ハーモニカ指導の実践から—

The First Step Toward Introduction of Music Education in Early Childhood:
Practice of Keyboard Harmonica Instruction at the Childcare Center

二見 美千代

竹内 典江

Michiyo FUTAMI

Norie TAKEUCHI

本研究では、幼児期の子どもが音楽教育のなかで鍵盤楽器に親しみ、楽しむことができる活動の可能性を探るため、認定こども園の3歳児クラスにおいて鍵盤ハーモニカの導入に向けた指導を行った。その結果、子どもの発達段階や個人差に応じた指導方法の工夫、演奏の動作に慣れるための練習の重要性、子どもの興味を引き付け飽きさせない工夫、そして集団活動のポジティブな影響力を活かすことの必要性が明らかに見て取れた。

キーワード：幼児期 音楽教育 遊び 鍵盤ハーモニカ

I. はじめに

保育現場では、保育時間の各場面において特定の音楽や歌を用いることで、子どもの活動の切り替えを促進する試みが広く行われている。また、日課として歌を伴う手遊びや伝承遊びを取り入れること、あるいは歌唱の時間を設けている園もある。園生活において、子どもたちは音楽を通して遊び、楽器に触れるなど、さまざまな形で音楽に親しむ機会を得ている。また、一部の園ではリトミック⁽¹⁾のように全身運動を伴った音楽活動も行われている。こうした日常的な活動を通じて、子どもは「音」や「音楽」に親しんでいる。それは、音楽に対する興味や関心が自然に育まれる機会となっているだろう。

しかし一方で、子どもたちは日常生活の中で自然に聞こえる音やリズムを感じ取り、それを楽しむことができるだろうか。そもそも、音楽とは与えられるものではなく、生活の中で自然に感じ、楽しむものではないだろうか。たとえば、自然と口ずさんでしまう「つくり歌」のように、子どもたちは自ら音楽を作り出す楽しさを知っているようにも思える。だからこそ、子どもたちが音楽を自然に楽しむことができる環境づくりを大切にしていきたい。

音楽の表現活動の一つとして、楽器の演奏が挙げられる。打楽器や鍵盤ハーモニカを使用した器楽合奏を取り入れている園も多い。木許（2009）の調査によると、A県内の保育所87園のうち、マーチング活動を実

施している園では、導入時期が3歳児からの園が9園、4歳児からの園が43園、5歳児からの園が35園であった。これらの年齢層では、楽器に初めて触れる子どもも多く、自己が発する音と他者の音が調和する体験を通じて、感性が育まれるきっかけとなる可能性がある。一方で、合奏やマーチングは発表会や運動会など、保護者が参観する場面で行われることが多く、完成度が求められる傾向が強い。この点について、木許は「保育所での生活がマーチング中心の偏ったものではなく、子どもが生き生きと活動できる一部として音楽が用いられるべきである」と指摘している。本来、保育現場での音楽活動は子どもが純粋に音楽の楽しさを感じられることを目的とするのが望ましいと筆者も考えている。

また、横井（2021）は「子どもの音楽的な表現には、保育者による一定の指導や援助が必要であり、その影響は大きい」と述べており、保育者には子どもの音楽表現を適切に支援するための技術や知識が求められる。しかし、実際の保育現場では、日常生活のサポートや季節ごとの行事など、保育者の業務は非常に多岐にわたっている。そのため、音楽表現（音楽活動）は保育全体の中でごく一部となり、保育者に専門的な音楽の知識や技術を求めることは難しいのが現状ではないだろうか。

文部科学省の「幼稚園教育要領解説」（2008）では、「表現」領域における内容（6）として、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わうこと」が示されている。また、その解説では以下のように述べられている。（一部抜粋）

「幼児が思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。ここで大切なことは、正しい音程で歌うことや楽器を上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである。」

ここでも、幼児が音楽を楽しむことの大切さや、その楽しさを「遊び」の中で体験していくべきであることが示されている。発達のにも、幼児期は「生活」や「遊び」の中で学んでいく時期である。

しかし、実際の保育現場では先に述べた発表会や運動会などへの完成度を重視する場合、「音楽で遊ぶ」という意識よりも、「正しく演奏する」ことが優先される傾向があるのではないかと考えられる。朴（2022）は、保育現場の音楽活動における問題として、幼児の発達に合わない過度な技術的要求や訓練が行われていること、また子どもの表現への喜びより大人（保育者や保護者）を優先するような選曲により、表現活動のプロセスを楽しめずに子どもも大人も疲弊してしまう状況を挙げており、その理由として次のように述べている。

「音や音楽は調和が保持されないと曖昧模糊とした雑音に聞こえてしまいがちで、自ずとリズムや音階を揃えることを優先してしまいがちだということが考えられる。また、発表会というどうしても既存の楽曲をみんなで練習して演奏するという劇場鑑賞型が一般的な慣習となっているので、その形態から逸脱しづらいし、慣習に倣っておいた方がある意味で進行しやすい。」

子どもが音楽表現の楽しさを実感できる活動を模索するために、発達段階に応じた実践を通じて自然な形で音楽に慣れ親しむ方法を探っていくことが重要である。その一つとして、幼児期に楽器遊びを通して、音楽を楽しめる豊かな心を育む方法を検討していくことが必要であろう。

Ⅱ. 目的

小学校学習指導要領（2017）の第2章第6節「音楽」にある第3「指導計画の作成と内容の取扱い」の2に

において、(5) イでは「第1学年及び第2学年で取り上げる旋律楽器は、オルガン、鍵盤ハーモニカなどの中から児童や学校の実態を考慮して選択すること。」としており、小学校音楽科で選択可能な楽器の一つとして鍵盤ハーモニカが位置付けられている。これを踏まえ、近年では多くの幼稚園や保育園において、就学後の音楽活動の準備として導入されている。

本研究の目的は、幼児期における「遊びを通した音楽活動」および「鍵盤ハーモニカの導入」に関する実践事例を基に、幼児期に適した無理のない楽器を用いた活動の可能性を探ることである。

Ⅲ. 方法

1. 調査方法

本研究では、3～4歳までにリトミックを含む音楽遊びを経験してきた子どもを対象に、鍵盤ハーモニカの導入に関する取り組みを実施し、子どもの行動観察を行った。実践方法は以下である。

- ・対象 A 認可こども園の3歳児クラス（3～4歳）20名
- ・実施期間 2024年5月から6月の約1か月半
- ・実施頻度 週1回、全5回
- ・実施時間 20～30分程度
- ・実施場所 子どもが普段活動している保育の部屋
- ・指導者 竹内

2. 対象者

(1) これまでの経緯

対象となる子どもは、生後0歳から発達段階に応じて、音楽に関わる活動を体験してきた。具体的には、音楽に合わせて自由に身体を動かしたり声を出したりすること、また簡単な打楽器を自由に鳴らして音を楽しむことなど、多様な形で音楽に触れてきた。中でもリトミック活動では、講師や保育者の動きや声を真似することや、音楽のテンポやリズムを感じながら身体を動かすことを取り入れた。このような活動を通して、対象児達は音楽に親しむ機会を比較的多く持ってきた。

(2) 3歳児と4歳児の発達の特徴

3歳児と4歳児の発達において、手指の操作性、認知面（言語・数概念）、対人関係の3点について述べておく。

①手指の操作性

3歳児は、手を左右交互に開閉する動きは真似をす

ればできるようになるが、見本がないと左右の手が同時に動いてしまうことがある。また、手指の細かい動きが上達し、フェルトペンやクレヨンを使って丸を描くような作業ができるようになる。

4 歳児になると、見本がなくても両手を交互に開閉できるようになる。また、道具を使う手とそれを支える手の役割分けができるようになり、指先を思い通りに動かせるようになる。

②認知面（言語・数概念）

3 歳児は、数の理解が進み、10 までの数を数えることや、大まかに把握することができるようになる。また、「おなかがすいたらどうする？」といった簡単な質問にも答えられるようになり、言葉で自分の気持ちや考えを表現することに喜びを感じ始める。

4 歳児になると、その日の出来事や過去の体験について複文で話せるようになる。また、語彙数も大きく増加する。しかし、大人の話を理解できない部分や、聞き取れないこともまだ多くみられる。このように、言葉の使い方が少しずつ広がっていく時期である。

③対人関係

3 歳児は、集団での「ごっこ遊び」や絵本を元にした「なりきり遊び」を楽しむようになる。この時期は、ルールが存在を理解し始める一方で、まだルールを守るのが難しい年齢でもある。

4 歳児になると、曲のリズムに合わせて体を動かすことや、音楽が止まったらその場で止まるといった動作ができるようになる。まだ自分のことで精一杯な部分もあるが、少しずつ周りの子どもたちにも意識が向き始め、他の子からの刺激が意欲につながることもある。また、自分の得意なことを発揮して認められると生き生きとし、他者の要求に応じて褒められることに喜びを感じる一方で、上手く応えられないとふざける様子もみられる。

Ⅳ. 倫理的配慮

研究対象の園及び担当保育者には、研究の主旨と方法、個人情報とプライバシーの保護、研究協力の意思と撤回の自由について口頭で説明し、本研究への同意を得た。

V. 結果

1. 鍵盤ハーモニカ導入指導の実践

(1) 事前の取り組み（第 1 回目）

第 1 回目の活動内容は、以下の 3 点に重点を置いて構成した。ここでは、鍵盤ハーモニカはまだ使用していない。第 1 回目の指導内容については、表 1 に示す。

- ・子どもが自身の手や指に意識を向ける
- ・息をリズムに合わせて吹く
- ・指遊びを取り入れながら指番号を覚える

手の左右を意識する活動においては、取り組み開始当初、どちらが右手か左手かの区別ができるのは数名のみであった。しかし、講師が歌で繰り返し問いかけることで区別ができる子が増え、多くの子どもが「こっち！」と答えながら正しく手を上げることができた。一方で、講師や他の子どもを見ながら、指示された手を上げようとする子もいた。

指遊びの歌を用いて指の名称や番号を意識する活動では、講師の動きを真似する子どもは全体の約半数であった。残りの半数は講師の動きに集中して注目している様子や、反対に活動への注意力が途切れているように見える子もいた。しかし、「みんなでやってみる？ 手を出して」と講師が声をかけて再度歌い始めると、ほとんどの子どもが指遊びに参加した。だが、歌詞に基づいた指を正確に使えた子どもは全体の約半数であった。

また、講師と一緒に「ゆびばんごうのうた」（譜例 2-1）を歌いながら歌詞に合わせて指でテーブルをタップする活動を行った。講師と同様に動作ができる子がいる一方で、肘を上げてタップする子などタップの方法は様々であった。他の指については、全員が指示した指を使えたわけではなかったが、リズムに合わせて楽しそうに取り組む様子が観察された。

さらに、リズムに合わせて息を吹く経験をする活動では、講師が「お誕生日のケーキのろうそくは、みんなどうする？」と問いかけると、「ふーってやる」という発言があり、2～3 名の子どもが実際に吹く動作をしてみせた。

(2) 鍵盤ハーモニカを用いた活動（第 2 回目）

第 2 回目以降の活動では、実際に鍵盤ハーモニカを用いた取り組みを行った。子どもにとって初めての鍵盤楽器体験となるため、楽器の置き方や扱い方についてクラス担当保育者の協力を得ながら指導を行った。この活動のねらいは以下の 3 点である。

- ・鍵盤ハーモニカで音を出す
- ・特定のリズムに合わせて鍵盤ハーモニカのホースに息を吹き込む
- ・「ストップの合図」に従うことを覚える

表 1 鍵盤ハーモニカ導入第 1 回目

目的	指導内容	子どもの活動	備考
自分の右手と左手が区別できる	<ul style="list-style-type: none"> ・「みぎてはどっちかな？」(譜例1)の歌で右手・左手を問いかける ・歌詞に合わせて右手・左手を上げさせる 	歌詞に合わせて左右を考えながら、または講師の左右の手の動きを見ながら手の上げ下げをする	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞に合わせて子どもから見て右手・左手を上げて見せる ・子どもは講師の動きを見ながら真似をしても良い
五本の指を意識する 指の名称に馴染む	歌を用いた指遊びをして見せる	講師の歌に合わせて全員一緒に指遊びをする	童謡などから2曲ほど用いる
次回に歌う曲を覚える	「ゆびばんごうのうた(1)」(譜例2-1)を歌い、歌詞に合わせて指を動かすよう指示をする	歌に合わせて指を動かす	
リズムに合わせて指でタップすることに慣れる	「ゆびばんごうのうた(1)」(譜例2-1)の「とんとんとん」のリズムで、指をテーブル上でタップする	講師の動作を見ながら一緒にタップする	保育者がサポートする
リズムに合わせて息を吹く体験をする	<ul style="list-style-type: none"> ・誕生日ケーキの燭の火を吹き消す動作を尋ねる ・「ふー」と息を吹き出させる ・一斉に息を吹き出すように合図する 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ふー」と息を吹く動作を個々でする ・合図に合わせて息を吹く 	子どもが声を出していた場合は、「息だけ」と伝える

表 2 鍵盤ハーモニカ導入第 2 回目

目的	指導内容	子どもの活動	備考
前回の活動内容を思い出す	前回行った活動内容を一通り実施する	前回の活動を思い出し講師と一緒にやる	
ルールを覚える	「ストップ」の合図でやめることを説明して練習させる	「ストップ」の合図でやめる	
鍵盤ハーモニカに親しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・「どうしたら音が出るのかな」と子どもに聞く ・自由に触ってみよう伝える 	鍵盤ハーモニカをケースから取り出し、鍵盤を自由に触れる	ここではマウスピースはつけない
マウスピースの役割を知る	マウスピースの役割を伝える	マウスピースについての説明を聞く	
鍵盤ハーモニカの音が出せる	「鍵盤ハーモニカを吹いてみよう」と子どもに促す	マウスピースをつなぎ、自分なりに音を出してみる	子どもの自由な活動を見守る
合図を理解し、音を止めることができる	「ストップ」で止まるルールを確認し、音を出す・止めるの合図を繰り返す	講師の合図で、自由に音を出したり、止めたりする	
鍵盤ハーモニカの音が出せる	「一人ずつ聞かせてね」と指示をする	一人ずつ吹いて音を出す	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者と共に子どもの個別の状況を巡視する ・音を出せない子どもの手助けをする
リズムに合わせて息を吹く	<ul style="list-style-type: none"> ・「ゆびばんごうのうた(2)」(譜例2-2)の「トントントン」の箇所は、息だけで吹いて見せる ・講師が「いきーを吹きましょ」と歌い、子どもに息だけで吹くように指示する 	講師の歌と同様に歌う	マウスピースは使わない
黒鍵を押さえながら、鍵盤ハーモニカを吹くことができる	<ul style="list-style-type: none"> ・「ゆびばんごうのうた(2)」(譜例2-2)の歌詞「いきーを吹きましょフーフーフー」を「くろーのけんばんトントントン」に変え、「トントントン」の部分で鍵盤ハーモニカの黒鍵をタップするよう指示する ・ピアノで黒鍵を使った即興伴奏をし、歌詞の「トントントン」の所で黒鍵をタップするよう指示する 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒の鍵盤をタップする ・歌のリズムに合わせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがタップする黒鍵の場所は任意でよい ・状況によっては半数ずつのグループに分けるなど不快な音に配慮する

これらの指導内容は、今後の活動の土台となるものである。第2回目の指導内容については、表2に示す。

初めて鍵盤ハーモニカに触れる場面では、準備の段階から子どもたちに様々な反応がみられた。

鍵盤ハーモニカを積極的に組み立てていく子どもがいる一方で、「できない」と困惑を表す子や、不安を感じて泣きそうになる子もいた。講師が「困ったら先生達に教えてね」と声をかけると、多くの子どもが一斉に「手伝ってください」と求めてきた。再度「今のうちに困ったときには教えてね」と伝え、子どもたちは落ち着いて「やってみよう」という姿勢がみられた。講師や保育者の手助けに対しては、少しの手助けを受け、あとは自分でしようとする子どもや、最後まで手助けを求める子どもなど、反応には個人差がみられた。また、自力で作業を成功させた際には笑顔を見せ、喜ぶ様子がみられた。

マウスピースをつないで音を出す活動では、子どもたちは次々と鍵盤ハーモニカを吹き始めた。鍵盤を押さえたまま長く音を出し続ける子、複数の鍵盤をランダムに押しながら音を出す子、特定の鍵盤を繰り返し吹く子など、音を出す楽しみ方は多様であった。一方で、音がうまく出せない子もいたが、講師が「ゆっくり後で一緒にやろうね。できるからね」と声をかけ、保育者と共に個別のサポートを行った結果、音が出せるようになり、笑顔がみられた。

黒鍵（黒い鍵盤）を探す活動では、ほとんどの子どもが容易に黒鍵を見つけ、自由に音を出していた。1つの鍵盤だけを吹く子もいれば、多数の鍵盤を吹く子、白鍵と黒鍵を区別せずに吹く子もいたが、保育者の「黒だよ」という声かけで黒鍵だけを吹くようになった。しかし、時間が経つと再び白鍵や黒鍵を区別せずに吹く様子も観察された。

(3) 鍵盤ハーモニカを用いた音楽活動の進行（第3回目）

この段階では、子どもたちが鍵盤ハーモニカを使用し、特定のリズムに合わせて「ド」の音を吹く活動を行った。第3回目の指導内容については、表3に示す。

まず、指遊びや替え歌を取り入れて練習してきた「ゆびばんごうのうた（1）」（譜例2-1）の歌詞で「ド」の音を強調して歌った。

次に、鍵盤ハーモニカを用いて特定のリズムの部分を「ド」の音で吹く練習を実施した。この活動では、2小節のフレーズを用いて最初の1小節目を息の準備に充てることでスムーズな演奏を促した。この時、子どもたちが「ド」の鍵盤を見つけやすいよう、鍵盤には

赤色のシールを貼った。それが識別の助けとなった。そして、特定のリズムを1小節ごとに繰り返して吹く練習を行った。

講師の声に合わせて右手の親指を動かす練習においても、一生懸命に取り組む様子がみられた。また、講師が声や表情に変化を持たせることで、子どもたちは講師の真似をしながら笑顔で活動に取り組む姿が観察された。さらに、講師の声に合わせて「ド、ド、ドー」と吹く活動では全員が吹くことができ、「ド」の音で吹くということが十分に理解できたと思われる。

次の取り組みでは、講師がピアノで子どもの吹く「ド、ド、ドー」という音に合わせて「ド、ド、ドー」と弾き、それと同時に和音進行も弾いた。その流れの途中で一部分を「メリーさんのひつじ」に変更したが、子どもがこのことに気づいた様子はなかった。

しかし、その後講師が「ド、ド、ドー」と歌いながらピアノで「メリーさんの羊」を弾いて聞かせたところ、「知ってる」「ひつじのうた」といった反応があり、子どもたちは初めて自身がその曲に合わせて鍵盤ハーモニカを演奏していたことに気づいた。講師が「『メリーさんのひつじ』と一緒にドドドーが吹けたね。もう一回吹いてみようか」と声をかけ、前奏に続けて「どうぞ」と合図を出すと、全員がタイミングを揃えて演奏を開始することができた。この活動の最後に「みんなどうだった？吹けた？困らなかった？」と質問すると、「吹けた」「できた」などの自信に満ちた返事が返ってきた。また、活動の最後の挨拶も、子どもたち全員が明るい表情で揃って行い、活動全体を通じて充実した様子がうかがえた。

この取り組みで「メリーさんのひつじ」を扱った理由は、子どもたちがすでに知っている曲であることと、この活動で扱う特定のリズムと同じリズムがこの曲中では多く存在するためである。

(4) 「ド」以外の音を用いた活動（第4回）

ここでの活動では、「ド」以外の音として、まず「ソ」の音を扱った。鍵盤上において「ソ」は「ド」から距離があることと、親指から離れている小指を使うため、子どもが使う指を分かりやすく覚えやすいことが「ド」の次に「ソ」を選んだ理由である。

第4回目の指導内容については、表4に示す。

ここでの活動は、前回「ド」で行った活動を「ソ」に置き換えた内容であり、子どもは講師の動作を真似しながら、おおそ「ソ」の音で声を出すことができていた。また、新たな音が増えることに対して喜びの

表3 鍵盤ハーモニカ導入第3回目

目的	指導内容	子どもの活動	備考
前回の活動や歌を思い出す	<ul style="list-style-type: none"> ・前回歌った「ゆびばんごうのうた(1)」(譜例2-1)で指遊びをさせる ・「一緒に歌ってね」と呼びかける 	講師の歌に合わせて指遊びを行う	
「ド」を1の指でタップすることができる	<ul style="list-style-type: none"> ・「ゆびばんごうのうた(1)」(譜例2-1)の最初の2小節分で指遊びをさせる ・「とんとんとん」の歌詞をを「ドドド」に変える ・「『ド』は鍵盤ハーモニカの中のどこにあるんだろう?」と聞く ・一人一人の「ド(1点ハ)」の鍵盤に目印を貼る ・「赤のシールの『ド』の鍵盤を親指で押さえてみよう」 ・「『ド』はどんな音かな?」と聞く ・ストップでやめる約束を確認し、1の指で押さえて音を出させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師と一緒に歌い指遊びをする ・「赤」の目印のある鍵盤が「ド」の鍵盤であることを知る。 ・鍵盤ハーモニカの「ド」を吹く ・講師の合図でやめる 	保育者は必要に応じて子どもの手助けをする
「ド」の音で吹くことに慣れる	<ul style="list-style-type: none"> ・「先生のまねしてね」と呼びかけ、「ドードードー」と歌う ・子どもが歌う「ドドドー」と交互に歌う ・「今度はみんなは鍵盤ハーモニカでまねしてね」と指示し、「ドドドー」と歌う ・子どもの鍵盤ハーモニカ「ドードードー」と交互に歌う 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師に続いて「ドドドー」と歌う ・講師の歌に続いて鍵盤ハーモニカで「ドードードー」を吹く 	講師は自身の歌とともにピアノでも「ドドドー」と弾く
「ド」の音で、特定のリズムを繰り返し吹くことができる	「今度はずっと『ドドドードドドードドドー』と続けてね」と繰り返すよう伝える	講師の歌に合わせてながら、鍵盤ハーモニカの「ド」で同じリズムを繰り返す	講師は、子どもと同じリズムを使ってピアノで和音を弾く
鍵盤ハーモニカで音楽に合わせて吹く体験をする	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに「ドドドー」を繰り返し吹かせる ・子どもが吹く「ドドドー」に合わせて、ピアノで「メリーさんのひつじ」を弾く ・子どもにピアノから何が聞こえてきたかを聞く ・ピアノで「メリーさんのひつじ」を弾きながら「ドドドー」と歌って聞かせる ・ピアノの「メリーさんのひつじ」に合わせて「ドドドー」を吹くよう指示する 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の指示「はいストップ」が聞こえるまで「ドドドー」を吹き続ける ・講師の質問の答えを考える ・ピアノの「メリーさんのひつじ」前奏の後、講師の合図で「ドドドー」を繰り返し吹く 	

表情を見せていた。

講師が「『ソ』はどんな音? 吹いてみて」と声をかけると、子どもたちは一斉に吹き始め、講師が「はい、ストップ」と合図を出すと、ほとんどの子がすぐに止めることができた。さらに講師が「『ソ』は『ド』と同じ音だった?」と尋ねると、子どもたちは「違う」と答え、音の違いを認識している様子がみられた。

「ソ」の音で声を出すことや吹くことに慣れた段階で、講師が弾くピアノの音を聴いて音名を答える音当

てゲームを行った。この活動では、子どもは、まず「ド」あるいは「ソ」の音名を答え、次に鍵盤ハーモニカで講師と同じ音を吹いて答える形式で進めた。

その後、「レ」「ミ」「ファ」についても同様に行った。

(5)「順番に吹きましょう」順次進行への予備練習(第5回)

次の段階では、「ド、レ、ミ、ファ、ソ」の5音を順次進行で吹く練習を行った。第5回目の指導内容につ

表4 鍵盤ハーモニカ導入4回目

目的	指導内容	子どもの活動	備考
前回の活動や歌を思い出す	<ul style="list-style-type: none"> ・「ゆびばんごうのうた(1)」(譜例2-1)を歌わせる ・指遊びをさせる 	講師と一緒に歌いながら指遊びを行う	歌っていない子には、歌うよう声をかける
「ソ」を5の指でタップすることができる	<ul style="list-style-type: none"> ・「ゆびばんごうのうた(1)」(譜例2-1)の10小節目の「トントントン」の歌詞を「ソソソ」に変える ・9～10小節目を歌いながら小指(5の指)のみで指遊びをさせる ・「『ソ』は鍵盤ハーモニカの中のどこかな？」と聞く ・一人一人の「ソ(1点ト)」の鍵盤に目印(青シール)を貼る ・「青のシールの「ソ」の音を出してみよう。どんな音かな？」と言い、音を出させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師と一緒に歌い指遊びをする ・講師の問いかけに対し「ソ」の鍵盤を探す ・青の目印(シール)の音を出す ・鍵盤ハーモニカの「ソ」を吹き、合図でやめる 	戸惑っている様子の子どもには、個別に声をかける
「ソ」の音で吹くことに慣れる	<ul style="list-style-type: none"> ・「先生のまねしてね」と呼びかけ、「ソーソーソー」と歌う ・子どもの「ソーソーソー」と交互に歌う ・「今度は、みんなは鍵盤ハーモニカでまねしてね」と指示し、「ソーソーソー」と歌う ・子どもの鍵盤ハーモニカ「ソーソーソー」と交互に歌う 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の歌に続いて「ソソソー」と歌う ・講師の歌に続いて鍵盤ハーモニカで「ソーソーソー」と吹く 	講師は自身の歌とともにピアノでも「ソソソー」と弾く
繰り返し同じリズムで「ソ」の音を吹くことができる	「今度はずっと『ソソソーソソソソソソソソソ』と続けてね」と繰り返すよう指示を出す	講師の歌に合わせて鍵盤ハーモニカを吹き、同じリズムを繰り返す	
音楽に合わせて「ソ」を吹く	<ul style="list-style-type: none"> ・「『メリーさんのひつじ』にあわせて『ソソソー』を吹きましょう」と指示する ・前奏に続いて、「どうぞ」の合図で音楽に合わせて「ソソソー」と吹かせる 	ピアノの前奏を聴き、合図で「ソソソー」を吹く	ハ長調でピアノを弾く
2つの音の違いを感じる	<ul style="list-style-type: none"> ・「ド」か「ソ」のどちらかでピアノを弾き「ドドドかな？ソソソかな？」と聞く ・「ド」か「ソ」の指示を出し、子どもたちに吹かせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの音が「ド」か「ソ」のどちらだったのかを答える ・指示された音名に従って「ドドド」か「ソソソ」の音を吹く 	
「ド」「レ」「ミ」「ファ」「ソ」の音を体験する	<ul style="list-style-type: none"> ・「レ」「ミ」「ファ」についても、「ド」や「ソ」と同様に「ゆびばんごうのうた(1)」で指遊びをさせる ・「ド」や「ソ」と同様に、それぞれの鍵盤に目印(シール)を貼る ・「ゆびばんごうのうた(3)」(譜例2-3)でそれぞれの鍵盤をタップさせる 	「ド」や「ソ」と同様に「レ」「ミ」「ファ」も1音ずつ練習していく	

いては、表5に示す。

ここでは、1曲の中で隣り合う音に順に移動する練習であったが、子どもに対して一度に全体を教えるのではなく、フレーズごとに隣の鍵盤へ移動する方法をとった。さらにゆっくりとしたテンポで長い音を吹く練習を行い、その後、フレーズ内で1音ずつ変える活

動へと進めた。これは、音の高さの変化や音と鍵盤の関係を自然に感じ取ることを目的としたものである。

具体的には、「ゆびばんごうのうた(1)」(譜例2-1)の歌詞「とんとんとん」の部分の音名に置き換えた「ゆびばんごうのうた(3)」(譜例2-3)を用いて、次のような練習を行った。子どもは、講師の動作(小指のタッ

表 5 鍵盤ハーモニカ導入第 5 回目

目的	指導内容	子どもの活動	備考
「ドレミファソ」を順に吹くことができる	「ド」「レ」「ミ」「ファ」「ソ」をそれぞれ特定のリズムで続けて吹かせる	講師に指示された音で吹く	・講師は音名を歌いながらピアノ伴奏をする ・リズムは「♪♪♪」とする
歌に合わせて「ドレミファソ」を順に吹くことができる	・「ゆびばんごうのうた(3)」(譜例2-3)で音に合う指をタップしながら歌わせる ・鍵盤ハーモニカで歌詞の通りの音で吹くよう指示する	・右手を上げて歌に合わせて指示された指を動かす ・歌に合わせて鍵盤ハーモニカで吹く	講師は歌詞を歌いながらピアノ伴奏をする
「ドレミファソ」の順に別のリズムで吹くことができる	・板書図を差しながら「ドドドドドー」と読ませる ・「レ」「ミ」「ファ」「ソ」も同様に読ませる ・「おとのかいだんをのぼりましょう」(譜例3)で上記と同様に歌わせる ・歌と同様にして鍵盤ハーモニカで吹かせる	・講師が差した図を見て「ドドドドドー」と歌う ・上記と同様に「レレレレレー」「ミミミミミー」「ファファファファファー」「ソソソソソー」と歌う ・歌と同様に鍵盤ハーモニカで吹く	・板書図は ・「おとのかいだんをのぼりましょう」(譜例3)の11～12小節目は使わない
1音ずつ伸ばしながら吹けるようになる	・先に示した板書図を書き換えて「ドーーーー」と長く伸ばして歌わせる ・「レ」「ミ」「ファ」「ソ」でも同様に歌わせる ・上記と同様に長い音を鍵盤ハーモニカで吹かせる ・「ドーレーミーファーソー」と1音ずつ長く伸ばしながら吹かせる	・長く伸ばしながら「ド」から一音ずつ上げて歌う ・同様にして鍵盤ハーモニカで吹く ・同様にして音楽に合わせて鍵盤ハーモニカで吹く	板書図は次のように書き換える 「ドーーーー」にする
「ドレミファソ」をまとまりとして吹くことができる	・講師の歌に合わせて「ひとつずつのぼりましょう」(譜例4)を吹かせる ・講師のピアノに合わせて「ひとつずつのぼりましょう」(譜例4)を吹かせる	・講師の歌に合わせて吹く ・講師のピアノに合わせて吹く	「ひとつずつのぼりましょう」(譜例4)の7～8小節目は吹かない

ピング)を真似しながら歌う。次に、番号で指定された指を使って鍵盤を押す。それを数回繰り返す。この際、この曲の最後にあたる「ソ、ファ、ミ、レ、ドー」と聞いた後は「ストップ」と合図を出し、音を出さないという練習を行った。

その後、フレーズ内の一部を吹く練習から、フレーズ全体を吹く練習へ移行した。具体的には、「おとのかいだんをのぼりましょう」(譜例3)のリズムで構成されたフレーズを「ド」から始め、1フレーズごとに1音ずつ「ソ」まで上げていく形式で進めた。この練習では、鍵盤ハーモニカを使用する前に、子どもには、講師の指示を聞き、動作を見て指を動かしながら歌う練習をさせた。音楽に馴染んでから鍵盤ハーモニカの演奏へと移行する一連の流れを踏襲した。

同じ活動を繰り返すことにより子どもたちが馴染むという利点がある一方で、途中で飽きてしまい、興味や集中を失う可能性も考えられる。そのため、○で表したリズムの図を黒板に書いて見せ、子どもたちの関

心を維持する工夫も取り入れた。

同音の繰り返しで構成されたフレーズの練習では、一部の子どもたちに手間取る様子が見られたため、その子達には保育者が個別にサポートを行った。これにより全員でフレーズを吹くことができた。

練習後に「みんなどうだった?」と尋ねると、多くの子どもたちは「できた!」と自信を持って答える一方で、「難しかったところもあったよね」と聞くと、「難しかった」と答える声もあった。実際には、子ども全員がリズム通りに正確に吹けたわけではない。全体的には揃ってフレーズを表現できていたが、以下のような様子が観察された。

- ・他の子どもより遅れて音を吹く
- ・誤った鍵盤を押さえて吹く
- ・常に同じ音を吹き続ける
- ・途中でマウスピースのホースを振り回すなどの遊びが始まる

音を長く吹くことや順次進行で吹く活動には、子ど

もたちは非常に興味を示し、飽きることなく取り組んでいた。特に長く吹く活動では、個々が息を持続させようとしており、「ド」から「ソ」まで順に1音ずつ長く吹くことができた。講師が「最初は何の音だった?」と尋ねると、4～5名が「ド」と正しく答えた。「次に何を吹いたの?」という問いには、別の子どもが「レ」と答え、続けて「次は?」と尋ねると、「ミ」と答える声が聞かれた。次第に答える子どもの数は増えていき、「ファ」と「ソ」については、全員が元気よく答える姿が観察された。

そして、「では、この順番でお歌を歌おう」と講師が「ドレーミーファーソー」と歌い始めると、子どもたちは途中から自然に一緒に歌い出した。さらに、「少し速くできるかな?」という講師の声かけに対して、「できる!」と元気よく答え、速めのテンポで無理なく「ドレミファソ」を講師とともに歌い切ることができた。

Ⅵ. 考察

鍵盤上での指番号の習得活動において、周りの子どもよりも覚えることに時間を要すると思われた一部の子どもも、周囲の子どもの様子がヒントとなり、楽しく活動に取り組める姿が観察された。一斉指導では集団活動の中で得られる相互作用が、子どもの学びを促進する効果をもたらすことも示唆された。

第2回の活動では、「吹く」という動作に慣れていない子どもたちがみられた。これにより、楽器を実際に吹く前に「吹く」動作を遊びとして体験させることが重要であることが明らかになった。

3～4歳児は発達的に言葉だけでの指示や説明では理解しにくい子どももいる。また、言語指示のみでは理解が不正確になりやすい。そのため、講師の動きを真似ることや講師や保育者と一緒に行う援助が有用であった。これにより、子どもたちはスムーズに活動に取り組み、活動の流れが途切れることなく進められた。

また、同じ曲を基盤にして少しずつ新しい要素を加えていく方法 (step by step) が、子どもたちの課題達成の助けとなった。初めて鍵盤ハーモニカに触れる子どもたちは、音を出すことそのものに夢中になり、積極的に活動していた。この姿勢を活かすため、指遊びや歌を使った演奏の準備、次に特定のリズムで吹く練習、さらにそのリズムで繰り返し吹く練習というように、段階的に小さな変化を取り入れながら活動を進めることが効果的であった。

さらに、3歳までに音楽遊びやリトミックでの全身を使った表現活動の経験が、鍵盤楽器の取り組みへの移行を円滑にする基盤の一つと考えられた。

鍵盤の位置と音名を一致させるため、鍵盤に目印(カラーシールや音名シール)を付ける工夫が有用であるが、音と色との結びつきが固定化される懸念や、目印に依存することにより鍵盤を覚えようとする意識が弱くなり、将来的に目印なしで覚えることに対し、必要以上に時間がかかることが考えられる。このことについては検討を要する。また、鍵盤ハーモニカの基礎技術である「タンギング」や「スラー」の指導は、この年齢の発達段階では難しいと思われたため、指で打つこと、音と鍵盤の位置関係を認識すること、息を吹くことに焦点を絞ることが適切であると考えられる。

鍵盤ハーモニカを使った活動では、音を出す楽しさを活かしつつ、自由に触れる時間を設けることで、子どもの意欲を引き出すことができた。このことから、幼児期に適した楽器活動を行うためには、子どもが楽しみながら自由に音楽や楽器に親しむ環境を作ることが重要であるといえる。

鍵盤ハーモニカに触れることが初めての子どもが意識的に息を吹くためには、事前に遊びを通して「吹く」感覚を養うことが効果的であった。具体的には、風船遊びやストローをイメージした遊びなどを取り入れることである。また、言葉による指示理解が難しい子どもには、講師が実演し、子どもが真似をしながら活動することや、手を取って教えるなど保育者の直接的な援助が有効と考えられる。

子ども同士の集団の場では、互いの行動が刺激となり、新しい活動への挑戦や学びを深めることが期待できる。こうした工夫により、子どもが無理なく楽器活動を楽しみながら成長する環境作りができることが明らかになった。

Ⅶ. まとめ

A園では、5～6歳児で打楽器や鍵盤楽器を用いた発表及び合奏活動が慣行されているため、鍵盤ハーモニカの習得が必要とされており、園のカリキュラムとして3～4歳児から鍵盤ハーモニカの導入を実施している。しかし、子どもに対し無理な教え込みを避けるよう、長期的・継続的な計画をもとに鍵盤ハーモニカの取り組みが求められている。そこで、本研究では、幼児期(3～4歳児)の子どもが無理なく鍵盤楽器に親しみ、楽しんでいける活動の可能性を探ることを目

指した。

その方法として、A園の3歳児クラスにおいて、鍵盤ハーモニカの導入の活動を5回継続的に行った。そして活動内での子どもの反応や習得の様子を観察し、幼児期の活動の特徴や課題を検討した。その活動を通して分かったことは次の点である。

1. 活動方法の工夫

子どもの発達段階と個々の差を踏まえて、活動の流れや指導方法などを組み立てることが大切である。例えば、指示の仕方をどうするか、どのような教材を用いるか、一斉指導と個別指導のタイミング、など詳細に準備・工夫する必要がある。教材に関して、本実践では「メリーさんのひつじ」を用いている。その理由は前述した通りである。子どもに馴染みの深い曲や道具、遊びを取り入れていくことで「楽しい」「自発的な」活動に繋げていくことも有効であろう。

2. その楽器を扱うための技能を養うことの必要性

楽器を吹いたり奏でたりする前に、動作として慣れておくことが必要である。鍵盤ハーモニカの場合は、「息を吹く」、「タッピング」などの感覚について遊びを通して掴むことなどが考えられる。

3. 活動の中での工夫

同年齢であっても、子どもの興味や集中力や理解力は様々である。興味を持つように、また飽きないようにするにはどうすれば良いか、分かりやすくするための工夫が子どもにとって「楽しい時間」を可能とするであろう。

4. 集団活動の力（相互作用）

いかにして集団活動であることのプラスの影響を引き出すか、子どもの動きを見落とさないように常に気を配ることが大切である。

幼児期の音楽教育の実践において、子どもが楽しみながら「歌」や「楽器」に取り組める環境を整えることが、その後の音楽の授業や日常生活の中でも「音楽」を楽しめる下地となろう。それこそが、本来の音楽教育の基本であるといえよう。

VIII. 今後の課題

幼児期の鍵盤ハーモニカ指導においては、演奏技術

を身に付けることのみに捕らわれず、子どもの発達段階に応じた指導内容や進行方法を計画する必要がある。遊びを通じた活動を基盤としながら、少しずつ鍵盤ハーモニカの技術を取り入れることで、音楽の楽しさを持続させることが可能である。また、導入段階で、手遊びなどを取り入れ、「楽しむ」工夫が長期的な学びの基盤となることを踏まえ、教材や指導方法をさらに検討することが必要である。

指示理解や判断などの視覚的な補助として鍵盤に目印（シール）を貼る工夫や、難易度を段階的に調整する方法が幼児の学びを支えるうえで有用である。その際、目印など視覚的な補助を徐々に無くしていく配慮が求められる。

今回は一園のみでの実践であり、子どもの変化を継続的に見ていくためには、期間・回数ともに少ない。そのため、できる限りの記録を取ったが、観察が不十分である点は否めない。記録を取る上での具体的な方法や役割分担、振り返りに関して更なる検討の余地があると考えられる。今後は、より多くの保育現場での実践を通して、これらの要素を体系的に整理し、有効な方法論を構築する必要がある。また、子どもの発達段階に適した音楽活動について、その可能性をより多角的な探究を深めていきたい。

謝辞

本研究にあたり、研究協力を快く引き受けてくださったA園の先生方に心より感謝申し上げます。

本論文は、竹内が行った実践を基にしている。

資料

譜例 1 「みぎてはどっちかな」



譜例 2-1 「ゆびばんごうのうた (1)」



譜例 2-2 「ゆびばんごうのうた (2)」



譜例 2-3 「ゆびばんごうのうた (3)」



譜例 3 「おとのかいだんのぼりましょう」



譜例 4 「ひとつずつのぼりましょう」

Piano

Two systems of music. Each system has a vocal line in treble clef and a piano accompaniment in grand staff (treble and bass clef). The vocal line consists of quarter and eighth notes. The piano accompaniment features a steady eighth-note bass line and a treble line with quarter and eighth notes. The first system is labeled 'Piano' and the second system is labeled 'Pf.'.

注

- (1) 日本ジャック＝ダルクローズ協会によると、「リトミックは、スイスの作曲家、音楽教育家であるエミール・ジャック＝ダルクローズ（1865 年～1950 年）によって創られた、音楽を総合的にそして合理的に学ぶための音楽教育法です。全身を使って音楽を動きで表現するリトミックと、音楽を聴く耳を育てるソルフェージュ、即興演奏を組み合わせ、音楽の諸要素を体験することを教育法の原点に置き、音楽理解を深め、動きによって得た筋肉感覚を生かし、その積み重ねにより自己を開放し、磨かれた完成をもとに、自己音楽表現を可能にする事がこの教育法の目的です。」、URL <https://www.j-dalcroze-society.com/> より引用、2025 年 1 月 4 日検索

階的・継続的指導の実践に関する一考察—豊かな表現による歌唱活動に着目して—」実践女子大学生活科学部紀要第 55 号、2018 年、pp.35-41

平田嘉之著、「4 歳児の即興性について考える—つくり歌の音楽的・言語的特徴から—」、音楽教育実践ジャーナル vol.18、2020 年、pp.36-45

二見美千代著、「保育者養成校におけるソルフェージュ教育の開発—フォルマシオン・ミュージカルとリトミックに着目して—」、日本幼児教育学会、2023 年、pp.51-60

幼稚園教育要領解説、2009 年 7 月

横井志保著、「保育者は音楽的な表現の保育をどう捉えているか—保育士の語りの分析から—」名古屋学院大学論集 人文・自然科学編 第 58 巻 第 1 号、2021 年、pp.11-21

引用・参考文献

- 秋葉英則・白石恵理子・杉山隆一監修、大阪保育研究所編集、「子どもと保育 3 歳児」改訂版、(株)かもがわ出版、2019 年
- 秋葉英則・白石恵理子・杉山隆一監修、大阪保育研究所編集、「子どもと保育 4 歳児」改訂版、(株)かもがわ出版、2019 年
- 河原紀子・港区保育を学ぶ会著、「0 歳～6 歳 子どもの発達と保育の本」第 2 版、(株)学研プラス、2018 年
- 木許隆著、「保育現場における音楽活動—その 2 5 歳児におけるマーチング導入法—」、埼玉純真短期大学研究論文集 第 2 号、2009 年、pp.53-58
- 佐藤由美子著、「子どもの発達と音楽表現について」、盛岡大学・盛岡短期大学部教職研究 (創刊号)、2018 年、pp.77-84
- 小学校学習指導要領、2017 年 3 月告示
- 坪能由紀子・加藤恵利子著、「幼児のつくりうたの音楽的構造分析：A 幼稚園での事例をもとに」、日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科 23 号、2017 年、pp.235-243
- 難波純子著、「楽器を用いた音楽表現の指導における保育者の悩みと困惑感」、富山短期大学紀要第 56 巻、2020 年、pp.81-87
- 朴守賢著、「幼児の発達に適合した創造的楽器アンサンブルの提言と実践—PARKS KIDS ENSEMBLE の活動から—」大阪教育大学 Educare43、2022 年、pp.37-46
- 長谷川恭子・前田智子著、「幼児の音楽表現における段